

# 日本人と武士道精神

## 武士道二局の歩み方を通じての考察

国士舘大学武徳育研究所 研究員

戸水俊輔

### はじめに

国士舘大学に入学前から銃剣道の修行を始め、本学に入学後課外活動クラブとしての銃剣道部を創部。卒業後国士舘大学に奉職し、銃剣道部指導者として今日に至っている。

旧加賀藩前田家18代目当主(全国石川県人会連合会会長)前田利祐氏<sup>まへだとしやす</sup>に筆者が会ったのは、今から5年前の晩秋であった。筆者が石川県の出身でしかも祖先が加賀藩に仕えていた係累に繋がっていることの所以によるものかも知れない。面談の場所は霞ヶ関ビル34階にある霞会館である。面談時間は2時間ほどで昼食をしながらの閑談であった。以前から武士道という人間の生き方、そして加賀藩そのものに興味があったので、直接ご当主に接遇を受け、書物ではなく生身の人間から話が聴けたのは貴重な体験であり、今後における自分自身の生き方を決定づける出来事であったといえる。

先ず武士のなりわいは、国を治めること(政治・行政)と国を護る(直接間接に国を守る)ことと定義したい。

本稿では、主君(あくまでも直接の主人)に奉公する2種類の侍たちの生き方を紹介して考えてみたい。一方は藩の行政機関で刀をソロバンに換え、見事に業績を上げる侍たちである。いまひとつは、直接の主人の命令を忠実に守り、我を屈し、世間の恥にも堪え忍んで大願を成就させる侍の姿である。いずれの武士も素晴らしい生き様であると感動を覚えないではいられない。

### 【武士の家計簿について】

昨年秋に「武士の家計簿」磯田 道史 著の新書判歴史教養書を購入した。この書には加賀藩の御算用者(会計処理の専門家であり、経理のプロ)だった猪山家の家計簿が、天保13年(1842)7月から明治12年(1879)5月まで37年2ヶ月わたる史実を基にして書かれてあり、小生の先祖が加賀藩前田家と所縁があることから殊更興味をそそられた。

特筆すべきこととして、藩の行政機関は、身分制と世襲制であったが、ソロバンがかかわる職種だけは例外になっており、御算用者は比較的身分にとらわれない人材登用がなされていたことである。御算用者も世襲ではあったが、家中の内外からたえず人材を確保していたし、算術に優れたものが養子のかたちで入ってきていた。そうし

なければ役所が機能しないからである。

また、武士家計の特徴は、召使いを雇う費用、親類や同僚と交際する費用、武家らしい儀礼行事を行う費用、そして、先祖・神仏を祭る費用の比率が百姓町人よりも高い。この費用を支出しないと、江戸時代の武家社会からは、確実に弾き出され、生きていけなくなる「身分費用」であるという点である。

江戸時代の始め、17世紀ごろまでは、武士身分であることの収入(身分収入)のほうが、武士身分であることによって生じる費用(身分費用)よりも、はるかに大きかった。武士の俸禄は多かったし、身分による行動制限は少なく、金融行為の規制もゆるやかだった。只、家来は多く、身分費用のなかの人件費は多かったといえる。

ところが、幕末になってくると、武士身分の俸禄が減らされて身分収入が半減する。しかし、武士身分であるために支払わなければならない身分費用はそれほど減らない。17世紀に拝領した武家屋敷は大きなままで維持費がかかる。また、家の格式を保つための諸費用を削るわけにはいなくなっていた。そのため、江戸時代の終わりになると武士たちは「武士であることの費用」の重圧に耐えられなくなってきたのが実際のところであった。

猪山家は借金地獄に落ちていたといってよい。あまりに借金が多くなったので、猪山家では「借金整理」の決意をした。猪山家は猛烈に家財道具を売り払っている。なるほど小さな借財は、この金で返済していった。

しかし、どうしても2200匁(880万円)ぐらいの借金が残ってしまう。そこで、大口融資先相手に「元金の4割をこの場で返済する。そのかわり残りは無利子10年賦にしてもらいたい」と交渉し、この交渉は見事に成功した。猪山家の「痛み」は債権者にも伝わっていた。すでに家財を売り払っており、逆さまにして振っても、何も出てこないことは明らかであった。これが最後の回収チャンスだということはわかりきっていた。元金の4割がこの場で回収でき、無利子だが10年賦で残金を返してくれるということで債権者が合意した。これらによって、借金総額は2600匁(1040万円)に減じ、しかも、そのほとんどが無利子になったのである。猪山家の家計は、利払いの圧迫から解放され、破産の淵からよみがえった。

こののち、猪山家の子孫たちは立派に藩士としてその勤めを果たし、戊申戦争でも大村益次郎から理財の才腕を買われ、活躍してその後は海軍の高官に登用されている。

「武士の家計簿」にみる昔の武士は、生活は貧しくとも常に模範的な生き方を心掛ける努力を怠らなかったという清貧の美徳があったことに注目する必要がある。武家の長男に対する子弟教育も感じ入るものがある。算盤と書の稽古、そして、四書五経の素読の演練を幼少期からおこない、家業を担い、公に奉ずる素養を養成する姿は、現代の我々が正に見習わなければならない。源平盛衰記「忠勤を抽んで殊に丹誠を致す

(真心を込めて物事をする事)」の言葉を引用して紹介したい。

### 【忠臣蔵にみる侍の生き方】

次にいまひとつの武士の生き方をみてみたい。

池宮彰一郎の同名小説を、ドラマ「北の国から」などで知られる杉田成道が監督した「最後の忠臣蔵」という映画が最近上映された。忠義に生きる武士や、武家の娘として凛と生きる少女など、古き良き日本人の精神性を、見事に体现した作品といえる。

最後の忠臣蔵の内容は赤穂浪士の中に、討入り後の使命を与えられた二人の生き残りがいた。一人は討入り後、切腹の列に加わることを許されず、大石内蔵助（直接の主人）から「真実を後世に伝え、浪士の遺族を援助せよ」との密命を受けた寺坂吉右衛門。そしてもう一人は、討入り前夜に忽然と姿を消した瀬尾孫左衛門である。孫左衛門は、まもなく生まれてくる内蔵助の隠し子を守り抜くという極秘の使命を内蔵助本人から直々に受けていた。討入りから16年間、名誉の死を許されなかった二人は、それぞれの使命を果たすためだけに懸命に生きてきた。吉右衛門は赤穂浪士の遺族を捜して全国を渡り歩き、遂に最後の一人にたどり着く。一方、孫左衛門は武士の身分までも捨て素性を隠し、内蔵助の忘れ形見を密かに育てあげる。やがて凛とした気品を備えた美しい娘に成長した娘は、天下の豪商・茶屋四郎次郎の嫡男に見初められる。娘を名家に嫁がせれば、孫左衛門の使命もまた終わるのである。そんな中、かつては厚い友情で結ばれ、主君のために命を捧げようと誓い合った二人が再会する。かたや命惜しさに逃げた裏切り者、かたや英雄になれなかった死に損ないとして。だが、孫左衛門の口から真実が明かされることはなかった。そしてとうとう娘の嫁ぐ日がやってくる。世は移り変わり、今では内蔵助の名誉は回復していたが、その存在すら隠してきた娘のお供は、孫左衛門ただ一人。ところが夕暮れに行く寂しい輿入れに、最初に吉右衛門が、続いて元赤穂の家臣たちが続々と現れ、お供を申し入れる。いつしか行列は、忠義の炎を松明にして掲げる男たちの大行列へと変わっていく。それはたった一人で背負ってきた重き使命が、全ての家臣の喜びの使命へと変わる瞬間であった。だが遂に使命を果たした孫左衛門だったが、彼にはまだなすべきことが残っていた。討入り前夜に極秘の使命を内蔵助本人から直々に受けていたことを成し遂げた彼は、内蔵助の位牌の前に自刃してかつて名誉の死を果たした仲間の後を追った。

以前「最後の忠臣蔵」にみる武士たちとオーバーラップする人物に会ったことがある。その人物は本学にも来訪したことがある小野田寛郎氏である。小野田寛郎氏は「ルバン島30年戦争」という本を著されている。大東亜戦争末期に旧陸軍中の学校を卒業してフィリピンのルバン島に派遣された。そこで日本が終戦を迎えた後も現地課者という任務を忠実に守り、戦い抜いた人物である。筆者は旧陸軍中の学校のOB会

である「のらくろ会」にも出席したことがある。

また、筆者が学生時代、本学の就職セミナーで国士館大学卒業生の特徴について興味深い話を聞かされたことがある。それは、本学卒業生の特徴は要領が決して良くはないが、「石の上にも三年」ということわざに象徴されるようにとにかく粘り強く頑張るということであった。そして、3年、5年と辛抱して頑張った結果、まわりに比べて群を抜く人材に成長しているという話であった。

願わくは当時の先生の言葉を思い出し、現代にも日本人の精神性として「忠臣蔵にみる武士道」は姿を換えて生きていることの実感を強く感じたい。

### 【武士道という生き方の敷衍】

昔の武士は、生活は貧しくとも常に模範的な生き方を心掛ける努力を怠らなかったという清貧の美徳があったこと、そして武士道における侍の基本の役割として、国を治めることすなわち政治と行政、そして直接間接に国を護ることが義務付けられ、自らそのことを誇りとして生きていくことを美徳とする。

下記に本学教育指針の抜粋を記して結びとする。

「今我々は新日本の元頭に立って居る。我々の一挙一動は世界が見ており、歴史が視て居り、更に神明が照覧する。

暫く節を折り、我を屈し、碩徳を師とし、善士を友とし、一心不乱、寸陰を惜しみて真剣な勉強が大切である。」

現代人は人間として生きる指標を、神仏を敬う信仰を基本にして武士道という規範を通して生きてみる。その敷衍(展開)として現在の生業(なりわい)を通じて、そのことに務め励むことがその絶大なる輔けと信ずるものである。

## あとがき

### 【私学国士館の濫觴】

周知の通り、「国士館」は、大正6年激動の大正中期、創立者柴田徳次郎先生ら青年有志が、智力と胆力を備えた有為の人材の育成に思いをはせ、東京麻布の地に私塾「国士館」を創立したことをもって始まりとする。そののち、吉田松陰ゆかりの地、江戸時代に、長州藩下屋敷「若林藩邸」のあった(現松陰神社)畔に学校を設立した。商業学校、中学校、国士館専門学校を経て、戦後、学制改革にともない、現在の大学へと至っている。

## 【銃剣道との出会いと学生連盟への発展】

筆者が国士舘大学に入学後、銃剣道部を創部して爾来30年余の歳月が経た。斯道を始めたきっかけは、昭和40年代初め頃のテレビ番組で大塚製薬提供のご当地番組でもある海軍兵学校を舞台にした青春ドラマ「若い命」である。俳優の南 道郎扮する鬼教官が銃剣道防具を身にまとい、筆者がはじめて目にする木銃で生徒をしごく訓練風景が強烈な印象として脳裏に残っている。銃剣道という武道との出会いである。

すべからく稽古事は、何かきっかけがあって始める訳であるが、やがてそのこと自体が大きな目的を持っているということが後々になってわかる様になった。

同好の者たちが好きで始めたクラブ活動であったが、稽古を続ける課程で修行には目的のある「道」が存在していることを知り得た。筆者が大学を卒業後に銃剣道の学生連盟結成に参加、連盟は関東地区学生連盟から全日本学生連盟へと発展を遂げていった。

銃剣道の修行を錬磨することで銃剣道修行に内在する「道」を知り、修行者である自分自身の行動が国家と関わりあることを悟ったと言える。銃剣道の修行過程で昇段して段位が増す毎に青少年、とりわけ学生たちへの指導の責任性を強く感ずる様になったといえる。

## 【武道と品格】

そして、斯道修行における品格の向上を考えた時、自己の修行目的を自覚し、錬磨を通じて心身の向上・充実を図り、責任ある行動を心掛けた時に自然発生的に生まれるものではなく、身近の良き規範(良き先輩や見たり、読んだりした物)を模倣して第2の天性と成さしめる努力をするものであると感ずるに至った。

かつて戦前、台湾の人たちが日本精神のことを「リップン・チェンシン」と呼んで「勤勉」、「向上心」、「正直」、「仕事を大切にする」、「約束を守る」、「公正である」等の日本人に存する伝統的な日本精神を大いに称揚して、実践していたことを台湾出身のジャーナリスト金美齡さんが「正論」で述べておられた。現代の日本人は、心新たにこれらことを身に体して行動して行きたいと強く感じている。

## ＜ 参考文献 ＞

「武士の家計簿」『加賀藩御算用者』の幕末維新 ― (著)磯田道史  
「最後の忠臣蔵」― (著)池宮彰一郎